

蘭部英夫著

『北欧 考える旅／福祉・教育・障害者・人生』

二〇〇九年五月／全障研出版部
一七〇〇円（税別）

本書は、筆者が一九九三年に北欧（主としてデンマーク、スウェーデン、フィンランド）を訪れて以来現在まで六回にわたる旅の記録をまとめたものである。福祉の先進国とされるこれらの国々の政策や取り組みについて、いわゆる研究報告書のようなかたちではなく、筆者が見聞した事柄が具体的にそしてわかりやすく紹介されており、一読して思わずため息をついてしまう。それほど日本との違いをあらためて痛感させられる本である。周知のように、日本は経済的に見れば、いわゆるGDPが世界二位とされるが、本のタイトルにも示されているように、本当の豊かさとは、あるいは豊かな暮らしとは何かを否が応でも考えさせられる一冊でもある。

筆者は初めて北欧を訪れたとき「日本とは三〇年くらいは差かもしれない」と感じ、二度目には「三世代くらい経ないと民主主義は育たないのかも」とため息をつき、そして三度目には「マラソンのトップランナーの背中はどう見えない」。そのくらい大きな差がつけられていると痛感したという。筆者が現在、全国障害者問題研究会の事務局長であり、また日本障害者協議会の理事等とされるなど、障害者の生活と権利保障に関わる仕事や活動に長く従事してきた経歴を加味すれば、その違いの大きさは想像を絶するといっても決して過言ではない。たとえば、次のような事実を見ればその一端が想像できるだろう。

スウェーデンのストックホルム県では、障害や高齢等で移動が困難なためタクシーを使う人に対して年間一六〇〇万円を支給しており、こうした移動保障だけで県全体の年間費用が七〇億円以上になるといわれる。しかもこれを全額自治体が負担しているというのである。今日日本で問題になっている障害者自立支援法の実施にあたって、国は、

問題が指摘されている障害をもつ人の負担を軽減するとして、この間年間一三〇〇億円程度を補助金として支出してお茶を濁している状況と比べると文字通り雲泥の差である。くり返しになるが、一つの自治体がかも移動保障という支援だけで年間七〇億円を支出できる財源を有しているという事実。筆者曰く「どう考えればいいのか」。以上のような問題意識を基盤にしながら、本書のテーマである考える旅は、さまざま福祉、教育、保健医療の現場を丹念に、一〇年以上にわたるくり返し訪れ、さらに定点観測の手法も用いることで、この間の北欧での多岐にわたる政策や取り組みの具体的な展開と歴史的経緯をていねいに紹介するだけでなく、その根底に流れている思想、つまり北欧の民主主義の伝統と力強さ、しかもその結論はきわめてシンプルであり、同時に奥深い。「まずは『みんなは一人のために』がある。だから『一人はみんなのために』連帯できる。そうした思想と実践におしめない努力をしていることなのだ」。

こうした北欧の暮らしを支える法律として「社会サービス法」があるが、これを成立させ、守り発展させる上では市民の政治的な参加は欠かせない。そうした参加は、たとえば、小さな自治体（ムーネ）の夜間の会議の様子からも見てとれる。このような日々の生活と政治的参加との直接的な連続性の上に民主主義があり、それを基盤に社会があり、政策がある。それがまさに北欧の豊かさである。そうしたメッセージが、多様な取り組みや事実の紹介というかたちでリアルに伝わってくる。

なお、本書で紹介されている主な内容は以下の通りである。まずフィンランドでは、学力世界一と称される教育の理由を、①無償性の徹底（大学まで学費は無料、義務教育では教科書だけでなく文房具や給食費も無償）、②教師の専門性の高さ（研修等の充実）、③平等な教育の徹底、④各学校ごとの裁量権の高さ（具体的なカリキュラムや授業時間、教育方法さらに人事までも学校と父母の協議によつ

て決定）にあるとし、とくに③については、ある小学校でのインクルージョン教育の実践とともに、就学前教育の義務化や就学困難な子どもへの手厚いサポート、放課後保障などが紹介されている。

スウェーデンでは、先の移動保障のほか知的障害をもつ人が通う特別学校の取り組みとその卒業生が働いているレストラン（市営のデイケアセンターとして運営）の様子、そしてIT先進国にふさわしいさまざまなITサポートとそれを就労につなげている様子が紹介されている。とくに、優れたIT技術の開発が進んでいる日本との違いを、高齢者や障害をもつ人が利用できるとかたちでその技術が普及しているかどうかにあるとする問題提起は重要である。

デンマークでは、「仕事・体験センター」といわれるデイサービスと作業アクティビティ、ジョブスクールから構成されている作業所の取り組み、「施設」ではない「家」としてのグループホームの現在、そして障害をもつ若者たちの余暇センターや障害をもつ人ともたない人がともに学んでいるイ

ブニングスクールなどの学習文化支援の取り組みも興味深い。さらに「場の統合」を重視しながら個別の特別なニーズに対応した障害児学校の多様な取り組みからは、あらためてインクルージョンとは何かを、そして障害をもつ人が自分に適したヘルパーを雇用し、障害をもつ人自身が介助態勢の管理を行なう「オーフス方式」と呼ばれ、北欧全域に広がった取り組みは、自立とは何か考えさせてくれる。

このような取り組みについて、本書では日本の障害をもつ人の現状との対比のなかで語られるがゆえに、「北欧の障害者たちと同じように、（中略）つましくも生き甲斐のある生活を求めることは『贅沢』なのだろうか」という素朴な問いに行き着く。そこからは、筆者のとりわけ障害をもつ人に福祉サービス利用の一副負担を強要する自立支援法の撤廃に向けた運動を根底で支えているエピソードが読み取れる。

小林繁（こばやし・しげる）明治大学

